

広東省緊急医療訪日研修団の東北大学訪問で講演しました (2018/11/1)

テーマ：健康で災害に強い社会をつくるには
会場：東北大学（仙台、日本）

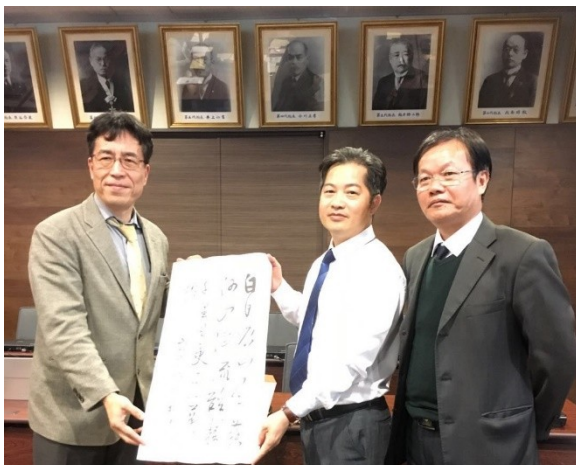
2018年11月1日（木）に東北大学を訪問された日中医学交流センター主催の広東省緊急医療訪日研修団の東北大学訪問において、災害医学研究部門の江川新一教授が講演しました。広東省の衛生健康委員会をはじめとする訪問団で、国立国際医療研究センター、環境省、聖路加病院、国立災害医療センター、厚生労働省、宮城県庁、石巻保健所など日本の災害対応で中心的な役割を果たす施設を訪問されたのちに、東北大学に来訪されたものです。災害科学国際研究所の今村文彦所長による東日本大震災の津波被害の報告のあと、江川新一教授が仙台防災枠組と災害リスクの考え方、災害後に起きる医療ニーズのシミュレーション、エボラウイルス感染症をモデルとしたシミュレーションについて研究の意義、平均寿命と災害リスクの相関など研究的な話題を中心に講演しました。

公衆衛生や感染予防・対応などに関わっている医師が多く、リスクを減少させるためにハザードやハザードへの暴露を少なくすること、脆弱性を少なくすること、対応能力を強化することという3つの次元に分解することで、防災も疾病の予防・治療も論理的に理解することができます。

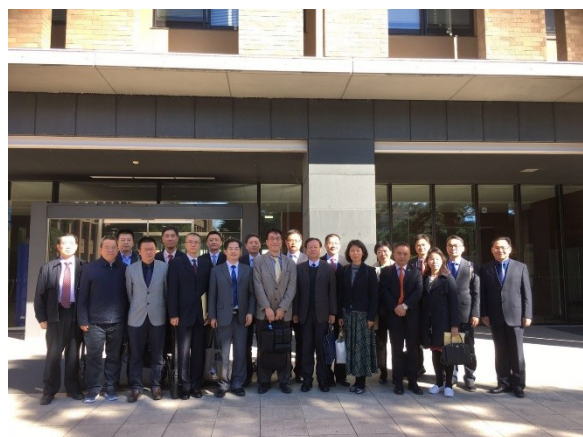
災害後に起きうる医療ニーズは、同じハザード（たとえば地震）であっても、建物が脆弱であれば倒壊による外傷が多数を占め、そのあとのリハビリテーションのニーズも増加します。日本でも中国でも前例のない高齢化社会に突入し、災害のあとのニーズは慢性疾患や生活不活発病の治療や予防が大切になってきます。シミュレーションを用いることで、被災地の特徴に合わせて医療ニーズの予測をすることが可能になってきます。

エージェント型シミュレーションを用いたエボラウイルス感染症のモデルでは、人々の心や態度に影響を与える因子を組み込み、社会の記憶力（忘れやすさ）によりどのように被害が拡大するかを再現することができます。感染予防のために必要な習慣を忘れてしまえば、感染は拡大します。その反対に、標準的な予防策を守ることを忘れない社会では、犠牲者の数は少なくて済みます。

平均寿命の長さは、災害リスクと反比例します。平均寿命は保健医療を含む社会全体の発展の成果であり、たとえ自然災害の多い日本のような国でも、社会の脆弱性が少なく、医療へのアクセスも含めた対応能力が高いためにリスクは減るのです。日中医学交流協会での講演を通して一般の医療従事者に防災の意識が高まれば何よりです。



講演後に記念品の書を受け取る江川新一教授



広東省の日中医学交流訪問団と

文責：江川新一（災害医学研究部門）